

## 慰霊行動とそれに関わる意識との関係についての研究

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
発達・福祉臨床クラスター  
津幡 法胤

世界と比較すると、日本人の宗教性には宗教行動は高いが宗教意識はそれほど高くはなく、その宗教意識は曖昧であるという特徴がある。また、日本人の宗教行動は戦後 60 年で大きく変化したことが示され、現在もゆっくりと変化していることが示唆されている。現在においても高い実施率を誇る宗教行動についてみることは、宗教行動が果たす役割についての解明につながり、最終的には宗教と関連があるといわれる人生の満足感との関係の解明にもつながることから意義があると考ええる。

本研究では、慰霊行動にはどんな意識が関係しているのかを調査するため、高齢者と大学生と対象に慰霊行動とそれに関わる意識についてアンケートによる調査を行った。

結果では、慰霊行動とそれに関わる意識において、慰霊行動と慰霊行動時の意識、死後について、葬式について、人生の満足度とは連関が見られず、慰霊行動とそれに関わる意識との間に関係性は見られなかった。次に、慰霊行動時の意識同士の関係において、死後についておよび葬式について、自分が亡くなったあとの慰霊行動の希望頻度、人生の満足度のそれぞれの意識同士をみたが、連関は見られなかった。しかし、慰霊行動時の意識において、大学生と高齢者の回答を比較すると共通点と相違点が見られた。次に、死後についての項目において、「魂の有無」では大学生と高齢者で違いは見られなかったが、「生まれ変わり」「死後の世界」「たたり」では高齢者より大学生の方が信じている人が多かった。一方、「虫の知らせ」においては年齢と性差が顕著に見られた。どの項目においても「はい」「いいえ」以外の選択肢を選択した人が年齢に関わらず多かった。

よって、慰霊行動とそれに関わる意識の結果から、慰霊行動は死後について何かを信じているから行うのではなく、その行動自体に意味を持っているため、多くの人が実施していることを示唆している。また、慰霊行動を行うときの意識同士の関係の結果から、慰霊行動時には誰かを慰霊行動の先に想定し、死者との心の親密さを感じて慰霊行動を行っており、その死者との心の親密さが慰霊行動に影響を及ぼしていると考えられる。そして、死後についての結果から、死後に対する考えが年齢や性別によって異なることを示唆している。

本研究から、宗教的な意識と関わりなく慰霊行動を行なっていることが浮き彫りとなり、日本人が本能的に死者とのつながりを慰霊行動に求めている姿が見てとれる。今後、慰霊行動は形を変えるかもしれないが、死者とつながるという部分が無くならない限り、宗教や慰霊行動は無くならず、日本人の生活に密着しつづけてゆくのだろうと考える。